
スティール

成太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スタイル

【Nコード】

N7856E

【作者名】

成太

【あらすじ】

甘く切ない青春バスケットStory!恋にバスケットに奮闘する主人公を見てください!

プロローグ

「付き合ってください！」

「わりい気持ちはありがたいけど好きな人いるんだ！」

私は今振られた…人生で1番最悪な日だ

今日は朝から雨が土砂降りだでも傘を忘れるくらい私は…

「こんなの…こんなの…」

私は彼からもらったハートの形をした鈴のストラップを手にとった

「なんで思わせぶりな態度…なんで」

私はストラップを投げた

雨は強くなる一方だ…

「これ君のだろ？」

一人の男の子が私が投げたストラップを手にとって現れた

「あっはい…」

「いらなの？」

「たった今必要無くなりました…」

私は下を向き涙を流しながら言ったちよつど良い雨だ涙を洗い流してくれる

「そっかあ…じゃあこれ俺にしてくれるかなあ？」

「えっ別に良いですけど」

「本当？ありがとうございます！あつ御礼って言ったら変だけどこれ…」

彼はポケットから携帯を取り出し着いていたストラップをとった

「はい！これを君に！」

「えっ？私に？」

私は彼の顔を見たとても可愛い顔だった

「うん！はい！」

「ありがとうございます」

私は手を伸ばしストラップを受け取った

「ついでに傘も！ビショビショだよ！」

「大丈夫です…ありがとうございます」

「良いから！遠慮しないで！」

彼は私の手に傘を持たせた

「でも悪いです本当に…」

「大丈夫！俺の家近いから！じゃ気をつけるよ！」

彼はそう言つと私の横を走り差つて行つた

「あつせめて名前…」

私の声は雨音にかきけされた…

「優しい人…」

私は彼がくれたストラップを携帯に付けた

「可愛い…」

そのストラップは子クマのストラップだったいつの間にか泣き止んでいた

「あれ涙が止まった…」

私が覚えているのはオレンジ色のエナメリバッグと彼の顔そして少し長い髪の毛だった…

第1話 再会

月日は過ぎ私は真新しい制服に身を包んでいた

「おはよ！若葉！」

「あつ真理ちゃんおはよう！」

「クラス割り張り出されてる見たいよ！」

「あつうん！見に行こう！」

二人は昇降口に張り出されているクラス割りを見た

「あつ私A組だ！」

「あつ私も！」

「また一緒だね！」

「うん！真理ちゃんと離れたらどうしようと思ってた！」

私達はさらにクラス割りを見た

「えっ！？月島君の名前がある……」

「若葉には言って無かったね……月島君さあ第一志望の高校落ちて滑り留めここだったじゃん！まさかおなじクラスになるとは……」

「ハハ…行こうか」

私達は1 A組のクラスに入った席じゅんは適当に座ってるらしい

「でさああの時ね…」

「よっ橋と藤沢！」

月島君が話しかけてきた

何で話しかけるんだよ…あなたが振った女だぞ

「久しぶり…」

真理ちゃんが答えてくれた

「…」

「いやあ参ったなあ！」

その時

チャリチャリ

聞いた事のある鈴の音が聞こえた

私は立ち上がりドアの方を見たその時オレンジ色のエナメルバッグをしまった男の子が教室に入ってきた

「ねえあの子かっこよくない？」

「ええ？カツコイイって言うか超可愛い！」

教室の女子達がざわつき始めた
彼は窓際の1番後ろに座った

「どうしたの？若葉？」

「えっいやっなんでもない…！」

ちょうど良いタイミングで担任が入って来た

席は最初だから自由席になった

月島君は廊下側の1番後ろにあの男の子は最初と同じ場所に座ってる

クラスの女子は月島派か男の子派に別れた見たいだ

二人の回りを女子が囲んでいる

おかげで私達は教室の真ん中に追いやられてしまった

「ねえ桐島君は彼女いるの？」

「彼女！？いないよ！」

彼桐島君って言うんだ

桐島君は質問攻めしてくる女子の返答に困っている様子だ

「ねえ若葉！選択どつする！」

「もちろん体育！」

「だよね！」

この学校は選択授業がある一年生は体育と音楽から選ぶ

「俺は音楽にする！」

桐島君は早々と音楽宣言をした

桐島君音楽なんだ…

その後は校則やら部活やらテストについてやら年間行事やらを話して終わった

「ねえ桐島君？カラオケ行かない？」

「わりい！部活あるから！」

「えっ何部なの？」

「もちろんバスケット！」

桐島君はバッグを手にとり早々と教室を出た

チャリチャリ

あつまただまた鈴の音が聞こえた

私は走って教室を飛び出した

「あっあの〜…」

私は廊下で叫んだ

「えっ!?!」

桐島君とその後ろをあるいていた女子が振り返った

「あっあの〜…」

「あっあぁ〜!」

桐島君は私に気付き走って私の前に来た

「鈴の子!だよね?」

「はい!よかった覚えててくれて…」

「覚えてるよ!ほら鈴もちゃんと付けてるよ!」

彼のオレンジ色のエナメルバッグの肩ヒモに私があげたストラップが着いていた

「よかった!その鈴の音聞いて分かったの!私もほら!」

私は携帯を取り出し彼からもらったストラップを見せた

「あっちゃんと付けてくれてるんだあ!」

「うん！あつ傘返さなきゃ…」

「ああ、傘なんか良いから！」

「でも…」

「大丈夫大丈夫！それよりちゃんと名前聞いてないよね？」

「はいっ！橘若葉です！」

「若葉ちゃんかぁ！俺は桐島翼！よろしくね！」

「あっはい！こちらこそ！」

「じゃあ俺部活行くから！」

「あっうん…バイバイ」

「バイバイ！」

彼は振り返り歩き出した

彼の後ろを歩いていた女子軍団が私を睨みつける

「ははははあんまり仲良くしない用にしょ…」

第二話 姉妹と先輩（前書き）

主人公が桐島翼に変わります

第二話 姉妹と先輩

「あつのっさあゝ俺に着いて来ても良いことないよ！」

僕は振り返り僕の後を着いてくる女子達に言った

「えっ！？私達は桐島君のバスケやってる姿が見たくて…！」

そうそう

可愛い

「ハアゝまあ良いけど…そのかわりコートじゃなくて二階いてな！？」

はあゝい

全員が返事をする

キュッキュッ

「よし体操開始」

僕はいつもどおり額にヘアバンドを巻き準備体操する

「一っ二っ三っ！」

僕は体操を終える

「良し行こう」

ダムダムダムダム

キュツキュツ

ヒュン

パサ

「キヤア〜可愛い！」

「こっち向いて！」

この歓声どうにかなんないかあ？

「綺麗なフォームだねえ！」

後ろから声が聞こえた

「!?!?」

僕は後ろを振り返った後ろには綺麗な女性が立っている

「あつすいません！今片付けますから…」

僕は急いでボールを拾う

「あつまだ良いよ！時間じゃないし！練習しな！」

「本当ですか？ありがとうございます」

「あら可愛い子ねえ…」

「私は座って見てる」

ダムダムダムダム

キュツダムダム

ヒュン

パサ

「キヤア〜うまい！凄い！」

割れんばかりの歓声が沸く

「すごいねえ！モテるんだ!？」

「いやあ所詮ミーハーですよ!！」

僕は言った

「あつこら！ファンは大事にしないとゴリラ川崎に怒られるよ!！」

「コラ橘！誰がゴリラだ!？」

「ゲツ来てたの？」

「今来たんだよ！」

「先輩！」

「よ！翼！相変わらずギャラリー連れてんな！」

「辞めてくださいよ！先輩まで！」

「あれっ川崎の後輩？」

「ああ中学の時のな！桐島翼って言うんだよ！」

「桐島ですよろしく！」

僕は挨拶をし手を出した

「あっ私は二年の橘紅葉ですよろしく！」

二人は握手した

「キヤア〜なにあの人？」

「きい〜絵になってる」

川崎先輩の顔いろが変わっていく

「ゴリア〜テメエ〜らさっさと出てけ！」

先輩が切れた

「キヤア〜なにあのゴリラ!? 逃げよ!」

先輩の人事でギャラリーがいなくなった

「ありがとうございます!先輩!」

「なに!いつもの事だ!練習続けていいぞ!まだ時間あるからな!」

「あっはい!それじゃ...」

ダムダムダムダム

キュッ

ダムダム

ヒュン

パサ

「彼良いバスケットするね!」

「だろ!?あいつがこの横浜創英を強くする!」

「あら珍しいわねえ!?あんたが下手褒めするなんて!?!」

「あいつは俺が出会ったプレイヤーで二番目に才能があるまあ本人はバスケットで1番必要な才能には恵まれてないけどな!」

「身長かあ...彼なんセンチなの?」

「150だ!」

「150!?私より…」

「それでもあいつは中学時はレギュラーだ!あいつにに救われた試合は数え切れない!」

「そっかそんな上手いんだ!」

「ごめん遅れた!」

「遅いぞ若葉!」

「ごめんお姉ちゃん…キヤア」

彼女は川崎先輩の顔を見たらしい

「こらお嬢さん!人顔を見てその反応はやりすぎだよ!」

「すっすいません!」

「アツハハハ!ナイスリアクション若葉!」

「こら橘!お前の妹じゃなきゃ将来ないぞ!」(笑)

僕は三人の所に戻った

「本当だよ若葉!顔が怖いのは生れつきだからさあ!」

「桐島！覚えとけよ？」

「いやだあ…冗談ですよ冗談！」

彼女は笑っている

「あれっ！？橘と紅葉さんは姉妹？」

「うんそうよ！」

「似てるでしょ？」

「似てるよ！そっくり！」

「オス！諸君何を話してるんだ？」

「あっキャプテンういゝす！」

僕は振り返った

「つつばっさっゝ久しぶりじゃん！」

「大輔先輩も！お元気そうで！」

「元気だよ！それより金貸して！（笑）」

「相変わらずですね！（笑）」

第三話 もう一人の新人部員

「おう橋早いなあ？」

「私より大輔さんの方が早いじゃん！」

「うん！？まあかわいい後輩が来るからね！」

「俺以外はまだですけど！」

「あつ大丈夫！翼と後一人しかないからあ！」

「えっ！？後一人って新人部員は二人？」

僕は顔を強張らせて言った

「ああ！内の監督さあ自分が認めた奴しか入れないんだよ！」

「じゃあ僕は……」

「大丈夫だ！お前は監督に認められた！それはお前が認められた証だ！」

川崎先輩が笑顔で言った

「先輩……ありがとうございます！」

「まあ紀夫は笑顔もゴリラだけだなあ！（笑）」

「大輔さん！やりますよ？（笑）」

「冗談だよお！」

ガラガラ

「ここが体育館かあ！」

何やら騒がしい奴がはいつて来た

「おっ義経！」

「あつ大輔だ！ひっさしぶり！」

男の子は笑顔で走ってきた

「よっ南川！」

「あつ川崎さんも！」

「誰？知り合い！」

「僕は知らないです…！」

「じゃ同じ中学じゃないねえ！」

「こいつは南川義経！監督が長野の田舎から連れてきた奴だよ！ほら義経挨拶しろ！」

「南川義経です！よろしゅ〜お願いします！」

「じゃあ君がもう一人の新人部員？」

「うん！？なんやちっこいのぉ！我中学生かぁ？」

「ハハハ…」

こいつ言ってくれる

「おい義経！お前と同じ一年だよ！」

「あっスマンスマンあまりにちっこいけえ中学生かと思ひよった…」

「なんか大阪の人？」

「生まれは大阪やけ育ちはいろいろ転々としていろんな地方の方言まじっちゃったんよ！」

「ハハハ面白い人！」

義経は若葉を見る

「うん！？何？」

「君偉いベツピンやなあ！」

若葉は顔を赤くする

「えっ！？いきなり何よ！」

「いやホンマにベツピンさんや！どうやわしと付き合ってえなあ！」

「コラ南川君！人の妹と口説くのもそれくらにしな！」

義経は紅葉も見る

「エエジャロ！お姉さんもベツピンやはあ！」

「よし義経！若葉ちゃんと付き合いたいかあ？」

大輔が聞く

「当たり前じゃ！」

「よしじゃ翼と勝負して勝ったらデートしても良いぞ！」

「ホンマが大輔？」

「あの先輩？勝手に話が…」

「大輔さん！」

「まあいいだろ！そのかわりお前が負けたら若葉ちゃんは翼とデートなあ！」

「ならあ負ける訳にはいかなあ！」

「ちよつと大輔さん！？」

「なんだ翼？負けるのが怖いか？」

「べつ別に…僕が勝ったら橘じゃなくて紅葉さんとデートしたいです…」

僕の一言でその場が静まる

「そっかぁ！紅葉いいだろ？」

「えっええゝそんないきなり…でもわかった…」

「お姉ちゃん!？」

「よし決まりだな！」

二人はコートに立つ

「良いか勝負は互いに攻守一本ずつ！だ！まずは義経が攻めで始め！」

ピィ〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7856e/>

スティール

2010年10月28日06時05分発行